

## 種痘をめぐる漢詩文

—幕末期を中心に—

合山林太郎

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(大学院文学研究科)

幕末の漢詩人や儒学者は、医学者と交友があり、また自身も経世に携わるなかで医療政策に携わる場合がある。彼らの作る漢詩や漢文は、通常、文学研究の対象として分析されることが多いが、この時期の医療政策について、知識層がどのように考えていたのかを知る上でも有効な考察の対象となる。

たとえば、咸宜園の塾主広瀬淡窓は、「接痘編序」(『淡窓小品』嘉永2年<1849>刊)において、種痘の効能を認めると同時に、後世の世界により優れた技術が登場したのは、決して聖人(孔子)が不完全だったわけではなく、「亦た宇宙の変の予知すべからざるを以てなり」(原漢文。以下、引用について同じ)、すなわち、森羅万象の変化には前もって把握することができないものもあるのであり、そのことが『易』に記されていると論じている。

淡窓の弟旭荘は、天保6年(1835)頃の制作と考えられる「桑原子華の天草に帰るを送る」詩(『梅墩詩鈔二編』嘉永元年<1848>刊)の中で、「土俗 痘を忌むこと 蛇を忌むが如く／之を病まば 便ち我が族類に非ずとす／父子兄弟 復た親しまず／婚媾姻婭 忍びて相ひ棄つ／家に在りて快痊を待つことを許さず／昇して空郊に往き 遠く避けしむ」と詠っている。すなわち、天草地方では天然痘にかかった者を忌避する習慣があることを指摘し、その上で、その地へ赴こうとしている桑原が、そうした習慣を一掃することを期待すると述べている。

よく知られているとおり、旭荘の周辺には、坪井信道や緒方洪庵など、蘭医が数多くいた。このほかにも、桑田立斎『牛痘発蒙』(嘉永2年刊)に序文を記した幕臣筒井政憲は、広瀬旭荘『梅墩詩鈔初編』(嘉永元年刊)への序文(弘化4年<1847>3月執筆)の中で、「蓋し其の詩に於けるや、風騷而下の諸作、悉く其の皮膜を解し、其の肺腑を察し、猶ほ洋医の解剖して得る所有るがごときなり」と述べ、旭荘の詩についての造詣を、解剖に喩えながら説明している。しかし、旭荘自身は、蘭方について自らの詩の中で詠うことには、それほど積極的ではなかったように思われる。

また、藩校有造館内に種痘館を設けたことでよく知られている津藩の督学斎藤拙堂は、嘉永5年(1852)に、痘苗の提供者である桐山元冲への謝意を述べた得たことを感謝する詩を作っている(「客歳の冬、女孫の生周歳にして洋痘を引かんと欲す〔下略〕」詩、『鉄研斎詩存』巻八)。ただ、拙堂の医学観は、たとえば、漢代の中国にも解剖(「解体」『鉄研餘滴甲集』巻三、嘉永7年<1854>刊)に当たるものが存在し、洋医と漢医との間に本質的な差異はないと考えるものであった点にも注意しなければならない。

発表者はかつて、若年期において吐方などの古医法を学んでいた佐賀藩諫早領の御典医野口良陽が、幕末期においては、種痘をはじめとする西洋の医術を学んでいたことを述べた(拙著『幕末明治期の日本漢詩文の研究』第四部第一章、和泉書院、2014年)。関西大学中村幸彦文庫には、良陽の詩稿が多数残されているが、その中には儒医としての研鑽を重ねてきた自身が、西洋の医術を施さなければならぬことを否定的に詠った詩が散見する。

淡窓や旭荘、拙堂と、良陽とでは、種痘などの西洋医学への評価のあり方は異なっているが、種痘を、儒学を基盤とする自らの価値体系のなかで考えようとする姿勢は共通しているように思われる。本発表では、このような漢詩人や儒者たちのへの新しい医療技術への向き合い方を、江戸後期以降の漢蘭折衷の医派のあり方なども比較しながら考えてゆく。